

注意訓練法がうつ病患者に及ぼす治療効果

The therapeutic effects of Attention Training Technique on depressive patients

佐々木 彩 (Aya Sasaki) 指導：熊野 宏昭

【背景と目的】 大うつ病性障害 (Major Depressive Disorder: MDD) の症状の持続には非柔軟な注意制御が関連しているので、注意訓練法 (Attention Training Technique: ATT) が治療的に有用だと考えられる。その効果や機序を多角的に検討するために、MDDの診断を有する患者に対して7週間のATT介入を実施した。

【方法】 研究参加者: 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院精神科で薬物療法を受けているMDD患者10名。**心理指標:** ①BDI-II ②STAI-T ③ネガティブな反うつ尺度 ④Detached Mindfulness Mode Questionnaire (DMMQ) ⑤Voluntary Attention Control Scale (VACS) **行動指標:** ①両耳分離聴課題 (DLT) ②統合失調症認知機能簡易評価尺度 (BACS) **生理指標:** 近赤外線トポグラフィー (Near infra-red spectroscopy: NIRS) によって測定した DLT と語流暢性課題 (verbal fluency test: VFT) 中の脳血流量 **手続き:** ①pre:心理, 行動, 生理指標を測定した。②ATT実施: 7週間毎日2回ずつのATTの取り組みを求めた。1週目, 3週目, 5週目, 7週目にフォローアップ面接を実施した。③post: pre測定と同じ手順で実施した。

【研究1】 各心理指標と各行動指標に関して、時期間でウィルコクソンの符号付順位和検定を行った。生理指標については、時期間で対応のあるt検定を行った。さらに、各指標間の変化の関連性を検討するために、各変数の時期間の変化量 (Δ) を用いてスピアマンの順位相関分析を実施した。**結果と考察:** 心理指標:ネガティブな反うつ, 特性不安が低減し, 分割的注意が向上することが示された。さらに, 抑うつ症状が低減し, DMが促進される傾向が示された。変化量同士の関連性より, 注意の分割が向上することでDMが定着し, 抑うつが低減する可能性が示唆された。**行動指標:** DLTについては, 各課題の正答率が向上する一方, 反応時間は課題の難易度によって変化する傾向が示されたが, 適切な注意制御の定着によってこの結果が得られた可能性が考えられた。BACSで測定された認知機能に関しては, 合計得点, 運動機能, 注意と情報処理が向上することが示された。さらに, 注意と情報処理と, DMの促進の間に関連性があることが示された。**生理指標:** DLTの選択的注意課題では, 左DLPFCと左縁上回, 注意の転換課題では左前運動野・補足運動野, 右DLPFC, 右中側頭回, 注意の分割課

題では右縁上回, 左ブローカ野三角部, 左側頭極の脳活動量の変化が示された。以上の内, DLT成績と Δ 同士の関連を示したのは, 選択的注意課題による左DLPFC, 注意の転換課題による右DLPFC, 右中側頭回のみであったが, それ以外の部位でもBACSの認知機能と多くの関連が示された。これより, 注意制御機能に関わる脳機能の変化の基盤には, 基礎的な認知機能の変化が関連する可能性が示唆された。VFTに関しては, 前頭前野～側頭葉の広範囲にわたって脳活動量の低減が示され, その変化には抑うつ症状の改善, 注意制御機能とDMの向上が関連していた。このことより, 抑うつ症状の改善には注意制御機能とDMが関連することが, 脳機能が媒介する形で示されたと考えられる。

【研究2】 MDD患者に対するATTの介入機序についての検討, およびATTが奏効する, あるいは奏効しない事例の特徴についての考察を行うことを目的とした。上記の10例で, フォローアップ面接での言語報告や状態の変化などについての質的な検討, 考察を行った。その際に, 各患者の心理指標, 行動指標の介入前後の変化を参照した。

【総合考察1】 研究1と研究2の結果を踏まえ, ATTの治療機序をFigureのように提唱した。

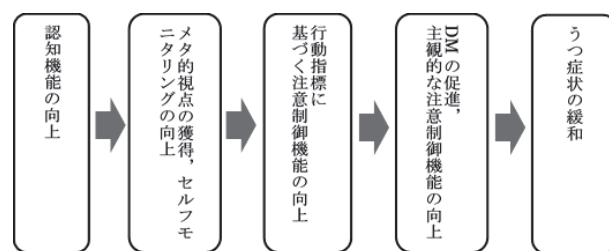


Figure. ATT治療機序の仮説

【総合考察2】 主に研究2を踏まえ, ATTの効果が発現しやすい患者の特徴として, ① うつ症状が軽症から中等症程度で, 病態が比較的安定している ② 反うつ症状が高すぎない ③ preでの認知機能が健常者と同程度 ④ DMの心理教育が機能するために十分なインテリジェンス ⑤ preでの主観的な注意の分割の低さ の5点が挙げられた。

【今後の展望】 今回対象となった患者は全員通常治療を受けていたので, ATT単独の効果を検証できていない。また, 統制群を設けていないので, 今後はランダム化比較試験を通して, 本研究結果の妥当性を検討する必要がある。